

# 楽しみからはじめる環境啓発イベントの可能性

竹原 玲奈

キーワード：環境教育、環境教育イベント、有関心層、無関心層

## 1. 背景と課題：偏りのない環境教育の必要性

現在、全国各地で環境に配慮した行動の実現に向けて多様な環境教育の取り組みが実施されている。しかしながら、市区町村が環境教育を推進する上での課題の一つとして、住民の環境に対する関心の低さが問題にされている。これは世論調査や企業が実施するアンケートによって、人々の環境に対する意識が一定して高いことが明らかにされている事実と矛盾する。

環境に配慮した行動の実現には、環境に対する関心の程度に関係なく学習の機会が提供され、対象が特定されない偏りのない環境教育の実施が必要である。そのためには、環境無関心層へのよびかけが求められる。また、高い関心があるという前提で行われる環境教育を見直す必要がある。

そこで、本研究では、環境に関心のない人のイベントへの参加促進に注目し、より多くの人を対象とした環境教育イベントのあり方を検討する。

## 2. 方法：「手づくりかばんイベント」による環境教育

本研究では、「環境」という表現に抵抗をもつと思われる環境無関心層の参加を促すために、「環境」を表に出さないイベントとして、地域の祭りのなかで行う「手づくりかばんイベント」を実施した。イベントは、“かばんづくり”という個人の関心から始められるところに特徴がある。イベントを利用することにより、楽しむことで学習への抵抗をなくし、より多くの人々が環境への関心の程度に関係なく参加できる。

また、かばんづくりの過程に簡単な環境クイズとごみ問題に関する講習を組み込み、イベントで作ったかばんを買物に使うよう呼びかけた。参加者がイベントで作ったかばんを買物に持参すれば、レジ袋使用量の削減につながり、これによって、「かばんづくり」が「環境に配慮した行動」と連結する。さらに、イベント後にはアンケートを実施した。そして、このアンケートを集計することによって、環境無関心層の参加の有無、および本イベントの啓発効果を検討した。

## 3. 結果と考察：偏りのない環境教育の実現に向けて

アンケートの結果から、回答者のおよそ7割が環境無関心層であることが明らかになった。イベントへの参加の理由として作っている人が楽しそうに見えたことをあげていることから、「環境」を表に出さないことによって無関心層の参加が促進されたと考えられる。

また、イベントの内容については、参加者全員から楽しかったという評価を得た。このことから、「環境」を表に出さないイベントでありながら、実際の内容には環境に関する学習を組み込むことによって、環境に対する関心の低い人でも抵抗なく楽しく参加することができたと解釈できる。

さらに、参加者のほとんどが、イベントで作ったかばんを今後も使いたいという意思を示した。このことから、“かばんづくり”を通じた環境教育によって、参加者の行動する意思を啓発することができたと考えられる。したがって、本イベントに環境教育の啓発効果があったと判断することができる。

## 4. 結論：偏りのない環境教育の可能性

「手づくりかばんイベント」は、環境無関心層の参加が多かったことから、環境への関心の程度に関係なく学習の機会を提供することができた。したがって、偏りのない環境教育が実施できたと考えられる。また、参加者がかばんづくりを楽しみ、かつ環境についての学習を受け入れたことから、“かばんづくり”という一つの趣味からはいる環境教育の可能性が見出されたと判断される。